

研究に裏付けられた教育:

『家政系研究紀要』の50巻記念号に寄せる(家政系研究紀要第50号発行記念祝辞)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荻上, 紘一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5990">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5990</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 研究に裏付けられた教育 —— 『家政系研究紀要』の 50 巻記念号に寄せる ——

学長 荻 上 紘 一

大妻女子大学の『家政系研究紀要』は、家政系の教員の研究成果と大学院学生の修士論文概要を掲載して、年 1 回発行され続け、今年度 50 巻を数えた。このことは、大妻女子大学において、家政系の研究が継続的に行われ、その研究の公表が半世紀に亘って続けられてきたことを意味する。

大学は、「自主的・自律的な運営の下に、高度な研究とそれに基づく高度な教育を行い、学位を授与する機関」と理解されている。即ち、大学における教育は、「研究に裏付けられた」ものでなければならない。このことは、我々にとっても自明のことであるが、大妻女子大学の家政系が、それを着実に実践してきたことを、大学として誇りたい。

そもそも、大学の教員は知的好奇心が旺盛で、「研究すること」を生き甲斐とする人種である。昔のことはあるが、「夏休みは学生がいないから、研究が捗る。一年中夏休みだといいいのだが……。」といていた同僚がいたことが思い出される。

ところで、現在我が国には、大学が 782 校（学生総数 2,868,928 人、教員総数 178,810 人）、短期大学が 359 校（学生総数 138,257 人、教員総数 8,633 人）存在するが、それらの中には、執行部から「研究などしなくて良い」と言われる、研究したくてもそのための時間が取れない、研究環境が全く整備されていないなど、「大学」としての必要条件を満たしていないものが存在するのが現実である。その昔、「大学の教員は研究ばかりやりたがって困る。そんなに研究をやりたいなら研究所へ行けばいい。」といていた公立大学の設置者がいたことを思い出す。

「研究の片手間に仕方なく教育をする」教員も、「研究などしなくても良いから、教育をやれ！」という執行部も、大学人のあるべき姿ではない。

「課題発見能力」、「課題解決能力」「創造力」……などを育成することの重要性が叫ばれているが、研究をしない教員にその様な教育が出来るとは思えない。

大妻女子大学の家政系において、社会のニーズに応える高度な研究とそれに基づく高度な教育が、今後とも展開され続けることを確信している。